

日本語の歴史の中の位相と性差

藤井 禎子

1. 日本語の歴史の中の位相

本稿では、主に江戸時代以前の日本語における位相¹を概観し、女性のことばとそれに関連する事項について紹介する。

まず性差について、現代でも、男性らしいことばづかい・女性らしいことばづかいという規範が少なからず存在しているが、日本語史的観点から見ると、古代より男性は漢語中心のことば・女性は和語中心のことばという、それぞれ異なる言語世界で生活してきたことが背景の一つにあると考えられる。

平安時代、日本語に固有の文字である平仮名・片仮名が生み出された。漢文訓読から誕生した片仮名は主として男子に、草仮名から発達し、消息や和歌を初め日記や物語にまで及んだ平仮名は、主として女子によって用いられた。男性は漢文的世界を教養の基盤としていたため、漢語や漢文訓読的表現を多く用いる傾向にあった。それに対して女性は、優雅で婉曲な言い方がよいとされ、和語中心のことばづかいをし、男性のような漢語・漢文訓読的表現の使用は避けていた。このような事情から、男性は男性らしい、女性は女性らしいことばづかいをするべきだ、とする規範意識が生まれ、鎌倉時代以降には『乳母の文』（鎌倉時代）『かたこと』（慶安3年（1650）刊）『女重宝記』（元禄5年（1692）刊）『男重宝記』（元禄6年（1693）刊）といった教訓書・作法書の類も書かれるようになる。

次に地域差であるが、今回は特に東国²のことばについて紹介する。

東国のことばは、古く奈良時代もしくはそれ以前から、中央の人々に存在を知られていた。『万葉集』では巻14に「東歌」というカテゴリーが設けられていることから、東国のことばに関心が示されていたことが分かる。

中央から関心をもたれていたとはいっても、概して東国方言はよいイメージをもたれていたわけではなかった。

- (1) 鶏が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み (大伴家持 『万葉集』巻20 4333番)
 - (2) あづまにて養はれたる人の子はしたゞみてこそ物は言ひけれ
(よみ人知らず 『拾遺和歌集』巻7 413番)
- 「とりがなく」は、「あづま」にかかる枕詞であるが、

東国人のしゃべっていることは鳥が鳴くようにわけのわからないもの、という捉え方をされていたようである。平安時代に入ると、中央集権が徹底され、上流階級の人々は、東国のことばに限らず「方言」そのものを侮蔑の対象として扱っていた。「都でない地方」はすべて「田舎」とみなされていたものと考えられる。

しかし、鎌倉時代以降、東国武士の台頭により、「都以外の地方」に政権が確立したのを皮切りに、東国方言、特に武士のことばが存在感・影響力を強めていった。彼らは合戦のたびに都に出入りし、結果として自分たちのことばを都に持ち込んだのである。東国のことばが都へ流入したことは、中央のことばの語法や発音に影響し、日本語の歴史の上で大きな役割を果たした。

また、鎌倉時代以降は、中央上流階級の人々のもつ方言観も徐々に変化していく。平安時代には都↔その他の地方 という図式であったが、鎌倉時代以降は個々の方言に関心がもたれるようになる。

- (3) 草の名も所によりてかはるなりなにはのあしはいせのはまをぎ

(救済法師 『菟玖波集』巻14)

このような、和歌・連歌の世界でも関心が寄せられていたことがわかる作品も現れた。そして江戸時代には、『物類称呼』（安永4年（1775）刊）のような、全国各地の方言を集めた書物も著された。

身分・階層差については、『枕草子』に次のような観察の記録がある。

賀茂へまいる道に、田植ふとて、女の、あたらしき折敷のやうなるものを笠にきて、いとおほう立ちて、歌をうたふ。おれ伏すやうに、また、なにごとすともみえで、うしろざまにゆく。いかなるにかあらむ、おかしとみゆるほどに、時鳥をいとなめう歌ふ、聞くにぞ心うき。「ほとゝぎす、をれ、かやつよ、をれなきてこそ、我は田植ふれ」と歌ふを聞くも、いかなる人にか「いたくななきそ」とはいひけん。仲忠が童生ひいひをとす人と、時鳥鶯におとるといふ人こそ、いとつらうにくけれ。
(『枕草子』209段)

清少納言は、賀茂に向かう途中で田植えをする早乙女たちを見かけたが、彼女たちの歌う田植え歌に不快感を覚えた。庶民のせりふに現れる、相手を蔑視し罵

倒することば（いわば卑語）は、貴族の口には決してのぼらない。森野（1991）は、この章段に、次のような見解を述べている。

清少納言は、この田植え歌に、特に「おれ」の使用に、下層階級の人々、当時の言葉を使えば「下衆」の愚昧な心と、それに見合う鄙俗な言葉遣いを見たのである。『枕草子』のこの段は、典雅・優美を旨として、用語の美的選択とその洗練に神経を使う貴族社会の女性たち、特に宮廷を舞台として活躍する女性たちと、そうした用語の修得、洗練とは無縁な、額に汗して労働に従事する女性たちとの間に埋めがたい文化的懸隔（culturegap）の存することを示す事例として注目したい。

（森野（1991））

同じ都に住む人間であっても、身分や階層によってことばや物事の捉え方に違いがあり、宮廷貴族の文化の花開いていた平安時代全体を通して、中央の上流階級とはかけ離れた下流の人々のことばづかいは、珍しいものあるいは聞き苦しく不快なものとして扱われていたのである。

その他、ことばの位相には、特殊な社会、閉鎖された社会集団特有のことばづかひも挙げられる。伊勢神宮の齋宮特有の語彙「齋宮忌詞」、中世に宮廷の女官・女房によって生み出された「女房詞」、近世の遊里に生まれた「廓言葉」などが挙げられる。

2. 女房詞

特殊社会のことばに「女房詞」を挙げたが、以下、この「女房詞」について簡単に紹介する。女房詞は現代の女性語、語彙にも影響を与えるものとして注目されるものである。

女房詞とは、女房詞とは、15世紀初め頃に、御所や仙洞御所に奉仕する女性、つまり宮廷女房たちの中で用いられ始めた独特のことばの一群である。高貴な人の前で食物や身の回りの不快感・不潔感を喚起しやすい事物を直接表現することを避け、遠回しな言い方に換えた。例えば、「くこん（酒）」「おまな（魚）」「すもじ（鮓）」「てなし（月経）」などといったものである。

宮廷女房たちがこのような言い換えを行った要因としては、彼女たちは典雅な品格を重んじており食物や不浄なものの名称をはっきりと口にすることははしたないとされていたこと、中世から近世にいたる転換期、武士に力を奪われつつある天皇や宮廷人の、経済的に困窮した状況を隠すあるいは口にすることが避けられていたこと、が考えられる。そして、「女房詞」という特殊な語彙の使用は、上品さ・優雅さを醸し出すと共に、ある種の特権意識も生んでいたものと思わ

れる。

『海人藻芥』（応永27年（1420））に「近比八將軍家ニモ女房達皆異名ヲ申ス」と記されているように、女房詞はやがて宮廷を離れて室町の將軍家に流れ込み、女性のたしなみ・教養として武士の屋敷に仕える女性の間でも使用されていった。武士の社会的地位は女房達より高くはなかったため、女房のことばは、より上位にある女性の権威あることばと見なされていたらしい。江戸時代に入ると、女房詞系の上品・優雅なことばは「大和ことば」「女中ことば」などと呼ばれるようになり、女性のことばづかひの手本・理想とされるようになった。女房詞は、時代が下るにしたがい、宮中から將軍家へ、さらに武家屋敷、庶民の女達の間まで伝わったが、このような女房詞系の語彙を使う女性と接することによって男性にも使われ、広く一般化の過程をたどったのである。

ところで、現代日本語の語彙にも女房詞由来の語彙がいくつか残っている。「ひもじい」「しゃもじ」「おなか」「おいしい」などは日常生活で頻繁に用いられるが、これらは待遇的な面から大きく二種類に分けられる。

例えば、「ひもじい」「しゃもじ」といった語は、空腹であることを意味する「ひだるし」「杓子」という語を上品に言い換えた語である。しかし、現代では上品・優雅といった、いわば待遇的な価値とは関係なく、完全に通常語として定着していると考えられる。これには、対応する語（「ひだるし」「杓子」）が現代ではほとんど用いられないことがないということも関係しているのではないかと考えられる。それに対し、例えば「おなか」「おいしい」は、それぞれ「腹」「うまい」を上品に言い換えたものであるが、こちらには若干待遇的な価値が残っているといえ、対応する語、つまり「腹」「うまい」も並行して用いられることがある。現代の敬語研究においては、これらは「美化語³」であるとする見方が一般的である。ただ、現代日本における言語感覚からいえば、もはや「おなか」「おいしい」は「美化語」というより普通の言い方であり、「腹」「うまい」は乱暴・ぞんざいな言い方という位置にシフトしている、と言った方が適当ではないだろうか。

このような、「美化語」や「敬語」と女房詞を関連づけることについては、今後も考察の余地が大いにあると思われる。

以上、「日本語の歴史の中における位相」というタイトルで、江戸時代以前の日本語の位相の概観、特に性差と、それに関連する女房詞について簡単に紹介した。

注

- 1 日本語学において、「位相」とは、「ことばが種々の事由によって異なったすがたを生じている現象を位相という。このような現象は、文法・音韻・語彙について起こるがとくに語彙において顕著である。位相が認められる語を位相語という」（『国語学大辞典』）と説明される。ことばの位相は、表現様式の違い（様式論）・表現主体の違い（様相論）の2つに分けられる。様式論とは、「同一人物が話し相手や場面によって異なった語・語法を用いることがあるというわけ方」である。それに対して様相論とは、「ある一人の人について、その人が含まれる社会のことばは話すがその社会に含まれない人はそのことばを話さないというわけ方」である。これには、
- (1) 地域などの物理的な差によって起こった現象として方言
 - (2) 性や年齢などの生理的な差によるものとして、男性語・女性語、幼児語・児童語・成人語・老人語
 - (3) 職業や階級などの社会的な差によるものとして、農業語・狩猟語・漁業語・泥棒語、御所ことば・華族のことば・武士のことば・軍隊のことば・学生のことば・僧侶のことば・組合のことば・遊女のことば（遊里語）・山窩のことば等々
- が挙げられる。今回の発表で扱った「位相」は、様相の方を指す。
- 2 「東国」の定義はさまざまあるようだが、『日本国語大辞典』では「②畿内から見て東の地方。北陸を除いた近畿以東、あるいは箱根、足柄、碓井以東の諸国」と説明されている。

- 3 「美化語」は、現在敬語の一項目とされている。従来は「丁寧語」の中に含まれていたものであるが、聞き手に対する敬意を示す「です」「ます」等とは明らかに異なる性質をもつものであるとして、辻村（1963）によって「丁寧語」から明確に区別された。辻村（同）では以下のように説明されている。

美化語（＝美称）。表現素材を美化する言い方。普通丁寧語といわれるもの。対者を意識して用いられることが多いが、必ずしもそうでない場合もある。

〈例〉お菓子。たべる。

参考文献

- 日本国語大辞典第二版編集委員会他編（2000）『日本国語大辞典』第2版 第1巻（角川書店）
- 井出至（1971）「古代の語彙Ⅰ」（阪倉篤義編『講座国語史3 語彙史』、大修館書店）
- 宇野義方（1986）『言語生活史』（『国語学叢書12』、東京堂出版）
- 沖森卓也・金子彰（1989）「位相語の歴史」（沖森卓也編『日本語史』、おうふう）
- 国田百合子（1964）『女房詞の研究』（風間書房）
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』（東京堂出版）
- 田中章夫（1998）『日本語の位相と位相差』（明治書院）
- 森野宗明（1991）「女性語の歴史」（辻村敏樹編『講座日本語と日本語教育10 日本語の歴史』、明治書院）

ふじい さちこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
博士前期課程1年